

## 二人の将軍 芥川龍之介の歴史認識

関口 安義

芥川龍之介というと、これまではとかく書齋人であり、厭世家であり、社会的関心の薄い腺病質の芸術至上主義者のイメージがつきまとうていた。そうした芥川神話打破のために、わたしはこれまで 蘆花「謀叛論」の影響 中国視察旅行の意味 関東大震災と芥川 といった角度から芥川をとりあげ、実証に照らしてその歩みを見てきた。それによって、これまで言われてきたような作家像を超え、芥川龍之介は社会性と先見性に富む作家であったことを確認するに至ったのである。本論は、その延長線上にあるとしてよい。

ところで、ここで言う「二人の将軍」とは、「将軍」、『改造』一九二一・一のN将軍と、「金将軍」、『新小説』一九二四・二の金応瑞将軍を指す。これら二人の将軍を登場させた小説の中に、芥川龍之介の歴史認識を読もうとするのが、本論のねらいである。

キーワード：芥川龍之介・「将軍」・「金将軍」・歴史認識・一九二〇年代

### 芥川像の変容

芥川龍之介は冷戦後、日本ばかりか世界各国で読み直され、その先見性や社会性、さらには創作技法の斬新さが改めて問われるようになった。ここで考えよう

とする歴史認識においても、芥川は旗幟鮮明、実にはつきりした考えを示している。そうした点が今日世界各国の芥川評価とかわるのである。これまでもアメリカやロシアやヨーロッパ諸国で芥川は評価されていたが、近年は隣の国、中国や韓国で芥川研究は急速に高まっている。芥川はいまや国際作家の顔をもつ。

わたしは冷戦終了前後から、中国、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、そして韓国と言った国々に行き、それぞれの国での芥川受容の現状を見て来ている。これらの国々での芥川評価は、日本の研究の影響を受けながらも、日本の研究者が見落としている面を拾い上げているところもあるのだ。ここで採り上げる歴史認識にかかわる芥川評価もその一つなのである。

日本における少し前までの芥川像には、とかく書斎人であり、厭世家であり、腺病質の芸術至上主義者のイメージがつきまとっていた。それが今以て芥川神話として一般読書人や高校生・大学生の芥川観にも反映している面がある。芥川の作品は、暗く、陰鬱なものが多いので、これまで積極的に読む気になれなかったという高校生・大学生が意外に多いのである。自死した作家であるとの印象も、作品評価にはマイナスに作用している。

二〇〇三（平成一五）年四月から日本では高等学校の教育課程が改訂されたのに伴い、国語では、これまでの『国語』『国語』に変わって『国語総合』が

登場した。一年生に該当する『国語総合』の教科書数は、全部で二十種。そのすべてに芥川龍之介の「羅生門」が登場する。教科書は教材の終わりに、作者紹介欄を置く。肖像写真入りである。この写真もこれまではいり合わせたように、晩年の痩せて前方をにらみ付ける姿のものが用いられていた。が、『国語総合』では、若き頃のさっそうとした写真を用いる教科書が半数を上回ることになる。厭世家芥川龍之介のイメージは、こうしたポートレートからも形成されたことを考えると、芥川像は確実に変わりつつあると言えようか。国際作家芥川龍之介は、今日改めてその評価が問われているのである。これまでとは違った芥川像は、この作家の歴史認識の問題においても、再検討を迫られていると言ってよいのである。

さて、ここで言う「二人の将軍」とは、芥川が中国視察旅行から帰った翌年、雑誌『改造』の一九二二（大正一一）年一月号に載った「将軍」の主人公N將軍と、その二年後一九二四（大正一三）年二月号の『新小説』に載った「金將軍」の金応瑞（まことすけ）將軍を指す。この二人の将軍を用いて描く小説の中に、芥川龍之介

の歴史認識を検証しようとするのが、本論のねらいなのである。それは一九二〇年代という世界史のうねりの中で、一人の文学者がいかに生き、いかに時代と闘ったかを跡づけする試みと言ってもよい。

### 芥川の歴史認識 三つの事例

本題に入る前に芥川の歴史認識として特に目立つ現象を三つほどあげよう。どれもがわたしの著書の中で、これまでとりあげてきたものであるが、本論の導入として要約して述べることにする。まずは、芥川と蘆花「謀叛論」とのかかわりである。またかと言われそうだが、研究は日進月歩、終わりのないものだ。わたしは三十年以上この課題と取り組んできており、過去繰り返し論じてきた。基調は変わらないが、その度ごとに新資料を示して実証に努め、論を補強し、説得力あるものにしてきたつもりである。

蘆花の「謀叛論」とは、言うまでもなく芥川が一高に入学して半年ほどたった一九一一年（明治四四）年二月一日、水曜日、第一高等学校第一大教場（講堂）で

行われた徳富蘆花の演説を言う。河上丈太郎や河合榮治郎らが所属していた弁論部が主催した特別講演会で、蘆花が前年に起きた天皇暗殺容疑者への秘密裁判の判決を批判した講演である。裁判はこの講演会に先立つ半月ほど前の一月十八日に二十四名に死刑判決、翌日半数の十二名が無期懲役に減刑され、二十四、五日の両日に幸徳秋水ら十二名が絞死刑を執行された。蘆花は政府のこのやり方に対して、反対の立場から鋭く非難し、「彼等十二名を殺したくはなかつた」と言い、そのやり方のまずさを指摘したのである。蘆花は「社会主義が何が恐い？」と叫び、「世界の何処にでもあゝる。然るに狭量にして神経質な政府は、ひどく気にさへ出して、殊に社会主義者が日露戦争に非戦論を唱ふると俄に圧迫を強くし、足尾騒動から赤旗事件となつて、官憲と社会主義者は到頭犬猿の仲となつて了つた」と言い、十二名を殺すことで、数え難い無政府主義者の種を結果的にまくことになつたと論じたのである。

幸徳秋水らの処刑後わずか一週間という時期に、これだけのことを言えたのは、当時の政治状況からすると奇跡に近い。それは自由と解放を願つた演説でもあ

つたのだ。現在残っている演説草稿を見ると、演説は最終の段に入っつていっつそう高潮する。そこには「謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である」とか、「我々は生きねばならぬ。生きる為に謀叛しなければならぬ。自己に対して、また周囲に対して」という、生きるためには謀叛もやむをえないという謀叛の精神が高らかに謳われていたのである。

わたしはこの蘆花の演説が、当時の一高生に与えた影響を長い間考え続けて来た。もう三十年以上も昔、まだ大学院で学んでいた頃のことになるが、わたしは芥川の一高時代の友人松岡譲に「蘆花の演説」(『政界往来』一九五四・一)という文章があるのに気づいた。わたしはその文章に、当時の一高生が「謀叛論」演説から受けた衝撃の典型を見たのである。以後、わたしは同じ時期に一高に学んでいた芥川も、この演説を聴いたのではないか、それによって彼も蘆花の謀叛のすすめに影響を受けたのではないかとこの仮説をたて、その論証に時間を用いることになる。

芥川に蘆花演説を聴いたというはつきりした資料が

ないので、当初は反論の大合唱であった。例えばわたしは、「羅生門」の「己が引剝(ひはぎ)をしよう」と恨むまいな己もさうしなければ餓死(うせじ)をする体なのだ」という自己解放の叫びには、蘆花の謀叛論の精神が響いていると書くと、芥川に聴いたという具体的資料が発見されない限り、そうした論は成り立たないよというわけである。これを悪しき実証主義と呼ぼう。確かに芥川には、今以て蘆花の演説を聴いたという資料は見出せない。そこでわたしは芥川に聴いたという文献がないならば、その周辺の人々を調べようと、長い時間をかけて調査にあたり、多くの新資料を見出すに至るのである。それらの収穫は『評伝松岡譲』や『評伝成瀬正一』、あるいは二〇〇二(平成一四)年五月に出した『恒藤恭とその時代』に結実することとなる。そのほか、わたしは久米正雄の「父の死」、松岡譲の「兄を殺した弟」「砲兵中尉」、それに井川恭の一高時代の作文「怒」などに蘆花演説の反映を認めている。

こうした中で蘆花の演説を聴いたと文献に残した人として、弁論部員だった河上丈太郎や河合榮治郎のほか、浅原文平・森戸辰男・田中耕太郎・矢内原忠雄、

それに芥川と同じクラスでは、菊池寛・久米正雄・松岡譲・成瀬正一・井川恭らを確認した。府立三中時代の同窓で、一高は第二部乙類に入学した西川英次郎も後年この演説を聴いたと証言している。

周縁の人々の調査は、研究の大事なプロセスであり、これによってわたしは、当時蘆花の「謀叛論」演説が学内あげての騒ぎとなっていたのを知ったのである。なにせ、当時学生新聞と言われた『萬朝報』は大きくとりあげるし、校長新渡戸稲造と弁論部長畔柳都太郎は、文部省から譴責処分を受けるとあつて、演説の余波も大変なものであつたわけだ。一番新しい発掘である井川恭の一高時代の日記「向陵記」には、一九一一（明治四四）年二月三日に行われた全学集会のことと詳しく記されている。それに、これまた近年、福生市郷土資料室が翻刻した芥川と同学年の森田浩一（第二部甲類入学）の日記にも、全学集会の記録があり、中に集会後十時からの授業に対し、「思想が混乱している中は授業などはやつても駄目ですから休みにして下さい」と言った者がいたことを記録している箇所がある。「謀叛論」演説の一高生に与えた影響の大きさ

を語る重要な証言である。こうしたことからして、わたしは学内外あげての騒ぎに、芥川龍之介一人がぼつんと圏外にあつたと考える方が無理、という結論に達したのである。悪しき実証主義からの離陸であつた。会場にいた、いないにかかわらず、当時の一高生が蘆花の演説を主体的に受け止めずにはいられなかつた状況は、周辺の人々の関連資料が語っていることでもあるのだ。

第二の事例は、芥川の歴史認識を問うのに落とせないう、中国視察旅行に關してである。芥川の中国行きは、これまでどちらかというとき常に過小評価がまわりついていた。彼は激動期の中国を旅行しながら、変革の鼓動を聞き逃した、そればかりか旅行で健康を害したので、その中国行きには、あまり意味がなかつたといふのである。彼の中国旅行記『支那游記』（改造社、一九二五・一一・三）にしても、これまでは例えば吉田精一の「つまらない読物ではないが、要するに小説家の見た支那であつて、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかも知れぬやうな、支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない」（芥川龍之介『三省堂、一九四

二・二二・二〇）が代表するような見解が支配的だったのである。芥川は激動する中国の政治・社会に眼を向けようとはしなかった、また、困難な状況におかれた中国人に対する共感も薄かったという考えである。だが、果たしてそれでよいのか。

わたしは六年ほど前に『特派員芥川龍之介』（毎日新聞社、一九九七・二・一〇）を書き、これまで否定的意味合いをもって論じられてきた芥川の中国視察旅行の意味を、一八〇度転換し、肯定的に捉えなおしてみた。そして『支那游記』は、芥川のジャーナリストとしての才能が遺憾なく発揮された作品であり、芥川は政治や社会に対しても確かな見識をもっていたと論じたのである。

ここではかいつまんで、二、三の例を示しておきたい。まず、上海で会った三人の文人中、清朝末期の革命家、章炳麟からの影響を挙げよう。芥川は寒い章炳麟の書齋で、中国のこと、さらには日中問題を深く論じ合うが、その時から三年後、当時のことを次のように回想する。

僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剥製の鱈をぶら下げた書齋に先生と日支の關係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。「予の最も嫌悪する日本人は鬼が鳥を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない」先生はまことに賢人である。僕は度たび外国人の山県公爵を嘲笑し、葛飾北斎を賞揚し、渋沢子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生れた桃太郎へ一矢を加へるのを聞いたことはないのみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる。

（「瞥見」『女性改造』一九二四・三・丁九）

ここには侵略者桃太郎（日本人）という指摘がある。日本の植民政策、ことばを変えると日本帝国主義が桃太郎という昔話を借りて糾弾されていると言つてよい。中国旅行から帰って三年、勃興するプロレタリア文学を意識し、芥川が章炳麟のことばをふまえて書いたの

が「桃太郎」(『サンデー毎日』一九二四・七・一)なのである。鬼の住む平和な島に何の理由もなく侵略し、「鬼に建国以来の恐ろしさを与えた」桃太郎は、「進め！ 進め！ 鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまへ！」と桃の旗を片手に、日の丸を打ち振り打ち振り、犬、猿、雉に号令する。忠勇無双の兵卒と化した餓えた三匹の動物は、逃げ回る鬼を追い、犬は鬼の若者をかみ殺し、雉は鬼の子どもを突き殺し、猿は「鬼の娘を絞殺する前に、必ず陵辱を恣にしなした」芥川桃太郎は、まさに帝国主義日本の戯画になっている。こういう作品が書けたのも中国で章炳麟に会い、また民衆の生活の实情を知ったからであり、この一事を以てしても、その中国行きを検討が必要なのである。

次に『支那遊記』に収められた「江南遊記」には、芥川が蘇州の天平山白雲寺の排日の落書きに驚き、そのいくつかを書き留めた箇所がある。書き下し文にし、幾つかを示そう。

諸君 爾快活の時に在り、三七二十一条を忘らず

べからず  
犬と日奴壁に題することを得ず

改めて説明を必要としない排日の落書きである。対中華二十一か条要求が中国人の誇りをいかに傷つけたかは、言うまでもないことである。また、「犬と日奴……」の方は、上海のパブリック・ガーデンの看板、「中国人と犬ははいるべからず」をもじっている。そこに中国人のやり切れない気持ちを見取っているのである。

さらに芥川は、日本人に対する激しい恨みを、七言絶句に託した落書きの詩を書き写している。以下のようだ。

奔蕩たる河山暮愁起ころ  
いづくより来るともに天を戴かざるの仇  
恨むらくは十万の横磨剣なく  
倭奴を殺し尽くしてまさに罷休せん

このような日本人として見たくもないような落書き

まで、芥川は採集する。芥川のジャーナリストとしての面目が躍如としており、同時にここに彼の歴史認識の確かさを読みとることが出来る。このような観察を続ける芥川は、湖南省の省都長沙で女子師範学校を訪問、中国人の反日運動がどのように展開しているかをしっかりと書き留めることとなる。

芥川の歴史認識でいま一つ、大きく採り上げたいのは、一九二三（大正一二）年の関東大震災に對しての対応である。芥川は大震災に言及した十もの記録を残している。これは同時代作家としては例を見ない多さだ。二つや三つではなく、十という数に注目したい。その中でもわたしは特別重視したいのは、「或自警団員の言葉」（『文藝春秋』一九二三・一一）というエッセイである。

芥川が震災時に自警団員をつとめ、隣近所の住民と共に徹夜で警戒に当たったことは、これまであまり知られていなかった。震災時の自警団というと、とかく怖い暴力団のイメージが伴う。確かに実情はそうであったのだ。そこであの知性作家の芥川龍之介が自警団に加わっていたとは考えられず、研究もされてこなか

ったのである。「或自警団員の言葉」は、生前の彼の単行本に収録されなかったこともあって、わたし以外で詳しく言及している人はいない。しかし、芥川と関東大震災というテーマを考える時、これは極めて貴重な一文なのである。芥川は震災二日目に三十九度の熱を出し、当初は自分の代わりに弟子の渡辺庫輔に徹夜の警戒を任せるが、熱が引いた時点で、彼自身も隣り近所の手前もあつてか、自警団員を勤めることになる。「或自警団員の言葉」は、その時の体験から生まれた一文である。

この文章の後半に、「自然は唯冷然と我々の苦痛を眺めてゐる。我々は互に憐あわれまなければならぬ。況や殺戮さつを喜ぶなどは、尤も相手を絞め殺すことは議論に勝つよりも手軽である」とのことばが見られる。これは芥川の自警団に對する痛烈な批判なのである。

在日朝鮮人が暴動を起こしたという流言によって、人々は刀や竹槍やトビロや棍棒などを武器にして、朝鮮人を追い立てては迫害を加えた。中島健蔵の『昭和時代』（岩波新書、一九五七・五・一七）は、そのよき証言となつている。自警団や軍隊・警察による犠牲者は、



正確な数は分らないとされるが、広辞苑には、「数千人の朝鮮人が虐殺された事件」と出てくる。自警団は町の要所をかため、警戒を強め、少しでもことはが不明確であったり、挙動不審であったり、挙げ句の果てはニンクスの匂いを嗅ぎつけるなどして「鮮人」と決めつけ、半死半生の目にあわせて警察に突き出した。それはエスカレートして朝鮮人大虐殺へと進むのである。芥川は自警団員として、時にこうした現場に立ち会ったのであろう。そして「殺戮を喜ぶ」人々に言いようのない反感をもつ。人々が興奮し、真実が見えなくなっている時に、芥川は冷静な観察者として虐殺行為に反対しているのである。

余談になるが、一昨年（二〇〇二）十一月、わたしは韓国ソウルの韓国外国語大学校で芥川の見聞性・社会性に関して講演をした。その際に芥川の関東大震災に対する対応を、「或自警団員の言葉」などを踏まえ、話を当初躊躇した。が、芥川の社会性を語るには落とすことが出来ないで、ことばを選びながら慎重に話してみた。そしてその後で皆さんから、戦前の日本にも真実を見極めようとした作家がいたことを知

り、うれしかったといった感想をいくつもいただいた。予想外のことだったのである。なお、芥川が「或自警団員の言葉」で用いた「殺戮を喜ぶ」ということは、小説「將軍」(『改造 一九三二・一』)ですでに用いていたことばなのだ。

ここで話は、本題に移行する。以下芥川の歴史認識を、二人の將軍、つまりN將軍と金応瑞將軍に見ていくことにしたい。

### 「將軍」のN將軍

いま、小説「將軍」に、芥川はすでに「殺戮を喜ぶ」という表現を用いていると書いた。それは「將軍」の二章、「間諜」の章に見られる。その箇所を引用しよう。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人

を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに転げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑点を拡げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を掲げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ気色があつた。「この×××らはおれにも殺せる。」 田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵は又刀を振り上げた。が、鬚のある支那人は、黙然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。…… (二間諜)

「將軍」はこれまでどちらかというと、主人公のN將軍イコール乃木希典將軍として読まれてきた。むろんN將軍には、乃木の影がまといつく。最近、京大大学院の奥野久美子が、その典拠は桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』にあるとの実証に支えられた興

味深い論文を『国語国文』(芥川龍之介「將軍」考、第七二巻第三号、二〇〇三・三)に書いたが、材源がそのあたりにあつたのも確かである。

軍神とまで言われた乃木希典を完膚無きまでに批判し、その無能ぶりを明確に指摘したのは、言うまでもなく『坂の上の雲』(初出『サンケイ新聞』一九六八・四・二三〜七三・八・四)での司馬遼太郎である。が、芥川はそれよりおよそ半世紀前に、モノマニアックな眼をした殺戮を喜ぶ人物として、乃木將軍を思わせる人物を描いていたのだ。発表された時代のことを考えると、芥川の歴史認識的確かさ、その先見性が鮮やかに浮かび上がると言つてよい。

わたしは『芥川龍之介 闘いの生涯』(毎日新聞社、一九九二・七・一〇)で、本作の背景をたどりながら、「N將軍」を乃木將軍に留めず、普遍化された冷酷な帝國軍人であるとした。この見解はこんにちも変わらない。わたしは「將軍」という作品は、芥川の時代との誠実な闘いの中から生まれた反戦小説であり、初期プロレタリア小説として位置づけてもおかしくない作品だと考えている。





に善良な市民が、自警団の徹宵警戒に参加し、「殺戮を喜ぶ」人間になるのと同じ描き方である。

これまでの「將軍」論の大半は、この視点を欠いていた。そしてN將軍を歴史上の人物である乃木將軍にストレートに置き換え、論じることには、エネルギーの大半を費やしていた。つまり、モデルとされた乃木將軍が十分に描かれているか、世間に伝わる乃木像をくつがえしたかといった点で論じられてきたのである。そのためこの小説に描かれた日本人の下級兵卒の悩みや、中国人の捕虜の扱いをリアルに描き、その悲惨な実態を明らかにした部分への読みが、おろそかになつてしまつたとと言えるのだ。不思議な話である。

わたしは先の『芥川龍之介 闘いの生涯』で、「將軍」を 反戦小説 とし、「初期プロレタリア文学として位置づけてもおかしくない」との説を持ち出してみた。その考えは、十年後の今日も変わらない。理由は以下に箇条書きする。

ア、天皇の名の下に、死地にかり出される兵卒の悲劇をとりあげる。

イ、捕虜の非人道的扱いをリアルに描き出す。  
ウ、人を殺すことが当たり前どころか、「殺戮を喜ぶ」戦場の人間の恐ろしさを描く。

エ、N將軍は普遍化された帝国軍人のボスとして形象化されている。

「將軍」は、確たる歴史認識のもとになつた小説である。それは作者芥川龍之介の中国視察旅行を通しての体験が、その歴史を見る目と相まつて生み出したものであつた。

### 「金將軍」の金心瑞將軍

この辺でもう一人の將軍、金心瑞將軍の問題に入りたい。「金將軍」(『新小説』一九二四・二)という小説は、日本ではこれまでほとんど問題にされなかつた。この小説に関する日本での研究は、辞典類には採り上げられるものの、他には見かけない。しかも事典の記述は、明治書院の『芥川龍之介事典』の和田繁二郎執筆のものを除くと、資料探索が甘く、慘憺たる書き方

である。ところが、韓国ではこの小説への言及が後を絶たず、すぐれた考察もなされている。例えば、昨年二〇〇二（平成一四）年八月三〇日、金曜日毎日新聞の「ひと」という欄に曹沙玉チョサオウという韓国の女性研究者が紹介されている。

記事の見出しは、「歴史の粉飾」批判した芥川に可能性託したい」となっている。「金將軍」は朝鮮を舞台とする小説であることもあって、韓国の芥川研究家は、これまでしばしば「金將軍」を採り上げ、論じることが多かった。芥川研究の国際化を示すよき例でもある。私たちは外国の研究にも、もっともっと目を通す必要がある。日本で論じられていないから、たいした作品ではないという考えではダメである。テクストは読み手のかかわりで伸び縮みする。「金將軍」は韓国の読み手によって再発見されているのだ。

毎日新聞の紹介によると、この「韓国屈指の芥川研究者」は、ソウルで開かれた韓国日本学会の定期学術大会で、作品の典拠となった『壬辰録』の異本類を紹介し、「芥川は当時の朝鮮資料を参考に、慎重な姿勢で『金將軍』を書いたと見られる」と報告したとある。

さらに「歴史を粉飾するのは朝鮮ばかりではなく、日本男児に教える歴史も伝説に満ち満ちている。芥川は小説の中で、そう厳しく指摘しています」と述べたと伝える。

ところで、『壬辰録』というのは、文禄・慶長の役えきを素材とした朝鮮の説話性の高い、作者不詳の読み物である。通俗性を帯びた一種の軍記小説といえようか朝鮮で言う壬辰倭乱に際し、祖国朝鮮の危機を救おうとした英雄を扱っている。この本の中では、日本人は倭賊と記されている。出典資料に関しては、韓国高麗大学の崔官が、日本の雑誌『比較文学』（第35巻、一九九三・三）に書いた論文、「芥川龍之介の『金將軍』と朝鮮との関わり」が参考になる。

日本の芥川研究者による「金將軍」の素材研究では、誰も彼もが、それは徳富蘇峰の『近世日本国民史』だとして、『壬辰録』に着目した人はいない。わたしが韓国の研究者から入手した資料の中に、桃水痴史「胡砂吹く風」があった。桃水痴史というのは、樋口一葉の小説の師匠、半井桃水の別名である。「胡砂吹く風」は、東京朝日新聞連載の小説で、明治二十年代の朝鮮

半島を舞台として、日本人の父と朝鮮人の母をもつ男の活躍を描いたもの。「胡砂吹く風」の連載五回目（二八九一・一〇・七）の冒頭は、

幼きより壬辰録を読み倭賊と怖れ忌みし人に  
危き所を助けられ言葉交せしさへあるを今伴はれ  
来りし処が其居留館なりと聞きては……

となっている。これは明治二十四（一八九一）年の時点で、桃水が『壬辰録』を読んでいた証拠ともなる。そうすると芥川も当然日本語訳の『壬辰録』を読んでいたという類推を呼ぶ。韓国の研究者からの情報によれば、植民地下、『壬辰録』は発禁本になっていたという。好奇心の強い芥川はそういう扱いの本だと知れば、無理をしても手に入れたことだろう。もっとも『壬辰録』には異本が六十余種もあるので、芥川が「金將軍」の素材にどれを用いたのかは、今後の研究の課題であるようだ。

本題に戻る。「金將軍」とは、どのような小説なのか、確認の意味も込めて、あらずじを辿ることにする。

まず、冒頭部分を引用する。

或夏の日、笠をかぶつた僧が二人、朝鮮平安南道龍岡郡桐隅里りゅうかうくんとくぐりの田舎道を歩いてゐた。この二人は唯の雲水ではない。実ははるばる日本から朝鮮の国を探りに来た加藤肥後守清正と小西撰津守行長とである。

二人はあたりを眺めながら、青田の間を歩いて行つた。すると忽ち道ばたに農夫の子らしい童児が一人、円い石を枕にしたまま、すやすや寝てゐるのを発見した。加藤清正は笠の下から、ざつとその童児へ目を落した。

「この小倅は異相をしてゐる。」

普通と変わった人相をしている童が気になつた清正は、「唯者ではない」として殺そうとする。しかし小西行長は、「この小倅に何が出来るものか？ 無益の殺生しやうじやうをするものではない」と言つて、清正の手をおしとどめる。三十年の後、加藤清正と小西行長は無数の兵とともに朝鮮を襲つ。人々は家を焼かれ、親は子を

失い、夫は妻を奪われ、右往左往して逃げまわる。ここはどこか同じ年に発表される、先にちよつと紹介した「桃太郎」の鬼ヶ島侵略の描き方にも通じる。宣祖王は義州に逃れ、明の援軍を待つ。こうした状況の困難を救うのが、「昔青田の畔に奇蹟を現した一人の童子」<sup>どろじ</sup>。成長した金応瑞であったというのである。金応瑞は倭将の首を切れとの命令を受け、キーセンの桂月香の協力で、小西行長を討ち取るクライマックスを迎える。

金応瑞は大いに吼りながら、青龍刀の一払ひに行長の首を打ち落した。が、この恐しい倭将の首は口惜しさうに牙を噛み噛み、もとの体へ舞ひ戻らうとした。この不思議を見た桂月香は裳の中へ手をやるや否や、行長の首の斬り口へ幾掴みも灰を投げつけた。首は何度飛び上つても、灰だらけになつた斬り口へはとうとう一度も据わらなかつた。(中略)

その夜も明けないうちである。王命を果した金將軍は桂月香を背負ひながら、人氣のない野原を

走つてゐた。野原の涯には残月が一痕、丁度暗い丘のかげに沈まつとしてゐる所だつた。金將軍はふと桂月香の妊娠してゐることを思ひ出した。倭将の子は毒蛇も同じことである。今のうちに殺さなければ、どう云ふ大害を醸すかも知れない。かう考へた金將軍は三十年前の清正のやうに、桂月香親子を殺すより外に仕かたはないと覚悟した。英雄は古来センティメンタリズムを脚下に蹂躪する怪物である。金將軍は忽ち桂月香を殺し、腹の中の子供を引ずり出した。残月の光りに照らされた子供はまだ模糊とした血塊だつた。が、その血塊は身震ひをすると、突然人間のやうに大声を挙げた。

「おのれ、もう三月待てば、父の讐をとつてやるものを！」

怪異な様相を帯びた叙述である。韓国の研究者によれば、ここは『壬辰録』の金応瑞による行長殺害の場面と一致しているという。首の切り口に灰をかけるという行為は、呪術的な存在の灰を用いると、切られた



ものは元に戻らないという朝鮮の伝説に基づく。ここには、「行長の首の斬り口へ幾掴みも灰を投げつけた」とある。また、桂月香を殺すという行為は、英雄を殺した女を生かしておくといひを呼ぶという話が『壬辰録』にあるのもよつたのである。ここに至つて芥川はやはり『壬辰録』を手に入れていたと言わざるをえない。日本訳は発禁になつたというが、どこかで手に入れたに違いない。その上で芥川は、「將軍」でN將軍が陛下の御為に中国人を惨殺したことを書き込んだように、本作では協力してくれたキーセン桂月香を行長の子を宿しているという理由で殺して、「腹の中の子供を引きずり出」すという残忍な行為に赴かせているのである。

「倭将の子は毒蛇も同じことである。今のうちに殺さなければ、どう云ふ大害を醸すかも知れない。かう考へた金將軍は三十年前の清正のやうに、桂月香親子を殺すより外に仕かたはないと覚悟した」と芥川は書く。ちなみに「英雄は古来センチメンタリズムを脚下に蹂躪する怪物である」とは、金応瑞將軍に向けられたことばながら、先に採り上げたもう一人の將軍、

N將軍への評言としてもおかしくないものなのである。さて、最後に結末の部分を見よう。

これは朝鮮に伝へられる小西行長の最後である。行長は勿論征韓の役の陣中には命を落さなかつた。しかし歴史を粉飾するのは必しも朝鮮ばかりではない。日本も亦小児に教へる歴史は、或は又小児と大差のない日本男児に教へる歴史はかう云ふ伝説に充ち満ちてある。たとへば日本の歴史教科書は一度もかう云ふ敗戦の記事を掲げたことはないではないか？

「大唐の軍將、戦艦一百七十艘を率ゐて、白村江（朝鮮忠清道舒川県）に陣列れり。戊申（天智天皇の二年秋八月二十七日）日本の船師始めて至り、大唐の船師と合戦ふ。日本利あらずして退く。己酉（二十八日）……更に日本の乱伍、中軍の卒を率ゐて進みて大唐の軍を伐つ。大唐、便ち左右より船を夾みて繞り戦ふ。須叟の際に官軍敗績れぬ。水に赴きて溺死する者衆し。艦舳廻旋することを得ず。」（日本書紀）

如何なる国の歴史もその国民には必ず光栄ある歴史である。何も金將軍の伝説ばかり一粟に値する次第ではない。

右の引用は、芥川龍之介の歴史認識を考える際に、かなり大事な箇所だ。芥川は中国視察旅行の際に、朝鮮を縦断して釜山を経由して帰国した。その際に立ち寄ったどこかの都市で日本語訳の『壬辰録』を手に入れたものと思われる。日本を愚弄しているとのことで発禁になった邦訳『壬申録』は、未だわたしは確認していない。けれども明治二十年代に半井桃水が『壬辰録』を読んでいることを考えると、旅行中あるいは帰国後、この本の邦訳に触れたことは確かである。

芥川は秀吉の朝鮮征伐で朝鮮に渡った小西行長が、朝鮮の地で愛国將軍金応瑞によって殺されたというのは、ウソであるところ指摘している。「行長は勿論征韓の役の陣中には命を落さなかつた」と芥川は言い、それは「歴史の粉飾」だと言う。その上で、「しかし歴史を粉飾するのは必しも朝鮮ばかりではない。日本も亦小児に教へる歴史は、或は又小児と大差のない

日本男児に教へる歴史はかう云ふ伝説に充ち満ちてゐる」と書き、例として『日本書紀』に見られる日本の敗戦記事をあげるのである。

芥川龍之介の歴史認識が躍如として示されるのは、最後の箇所だ。「如何なる国の歴史もその国民には必ず光栄ある歴史である。何も金將軍の伝説ばかり一粟に値する次第ではない。」

「一粟に値する」とは、「一笑に付す」というか、笑つてとりあげないという意味である。芥川が「金將軍」で書きたかつたのは、実は歴史認識の問題にあつたことが、ここに至つて判明するのである。歴史は改ざんされてはならないし、歴史を粉飾しても意味はないという考えだ。先に日本の「金將軍」研究は、和田繁二郎の事典の記述以外はどうにもならないとしたが、和田氏の事典記述は、以下のようだ。

金が月香を殺すところで、「英雄は古来センチメンタリズムを脚下に蹂躪する怪物である。」と英雄の非人間性を批判し、また、事実の粉飾については、「如何なる国の歴史もその国民には必ず光

栄ある歴史である。」と言い、皇国史観への批判を試みている。

和田氏は「金將軍」に「皇国史観への批判」を見出しているが、まっとうでの確な読みに支えられた見解だ。つきつめればそれは歴史認識ということになる。先に出典研究のところで、名を挙げた韓国高麗大学の崔官の「芥川龍之介の『金將軍』と朝鮮との関わり」（『比較文学』第35巻、一九九三・三）は、韓国での「金將軍」評価の高さを物語る。さわりの部分を見ると、「比較文学的な立場から見て、また『金將軍』が関東大震災の傷が癒えない時代状況の中で書かれたのを考慮すると、朝鮮側の記事に取材して優れた文学作品を仕立てあげた芥川の文学的洞察力は注目値するので

ある」とある。芥川の見性を認められた。

わたしもむろん日本では黙殺に近い本作「金將軍」が、芥川の歴史認識を考える上で、「將軍」や「桃太郎」などと並んで大事な作品であるとするのにやぶさかでない。八十年前に書かれた小説ながら、内容は今日の的なものを含んでいる。ここに芥川のメッセージが託されているとしたい。

N將軍と金心瑞將軍、この二人の將軍を主人公としたそれぞれの作品に、わたしたちは芥川の歴史認識をはつきりと読み取ることができるのである。

#### 追記

本稿は二〇〇三年六月七日、文教大学で開催された日本社会文学会春季大会での基調講演をもとに、まとめたものである。